

レオ・ヴァイスゲルバー

言語研究の意義について

福本喜之助 訳

訳者のはしがき

著者 Leo Weisgerber のこと、特にジュネーヴ学派を代表する Ferdinand de Saussure との関係、言語の現象形式の問題、要するにその言語観の要旨については、既に大阪外国語大学の八木浩氏と神戸大学の小松原千里氏の御配慮で、「群狼」第4号（昭和38年）で公表した「社会の認識形式としてみた言語」(Sprache als gesellschaftliche Erkenntnisform)（ボン大学就任講演となったもの）の解説で述べたのでここでは割愛することにする。又昭和39年の「言葉と精神教育」(Muttersprache und Geistesbildung)（関西大学文学論集）同年末の「言語教育の問題」(Die Aufgabe des Sprachunterrichts)（関西大学ドイツ文学）でも、それぞれ簡単なはしがきを添えておいた。

本稿は同教授の „Vom Sinn der Sprachwissenschaft“ を訳したものであるが、その内容は „Das Gesetz der Sprache“（1951）や同じく著者より寄贈された改定版 „Das Menschheitsgesetz der Sprache“（1964）の最後の1章 Der Sinn des Sprachstudiums と大体同じものであると思われる。ただ訳者は、本邦の社会通念で、この「言語学」(Sprachwissenschaft) という表現が少し狭義に解されているように考えられるので、ここで一応、題名だけは、 Sprachforschung, 又は、 Sprachstudium（言語研究）ということにした。一民族を基盤とする現代ドイツの言語研究については、Weisgerber, Sprachwissenschaftliche Methodenlehre (1951) 及び拙論「ドイツ語学の方法論に現われた静的言語観と動的言語観」(昭和30年関西大学文学論集)を参照されたい。

文中に Bacon の引用文がでてくるが、ドイツ語学を専攻するものとして誠に遺憾なことではあるが、ラテン語の学習不足のため、訳者にとって、このラテン文は極めて難解であった。そこで Dr. Anna Miura 先生をはじめ、ドイツ人友人諸氏の御協力を仰いで、やっとどうにか、訳はつけてはみたが、決して安心はできないので、念のために、訳文の後にラテン語の原文をも添えることにした。国語学をはじめ、近世や現代の西洋文学を研究する人々にも、古典文が楽に読める人も多いと聞いているので、訳者は、田中秀央先生に申訳ないことと、いつも反省している。識者の御高教御叱正を乞う次第である。

最後に「内的言語形式」(Die innere Sprachform)のことを述べているが、Humboldt にはじまるこの概念の発達史については、L. Weisgerber (Das Problem der inneren Sprachform und seine Bedeutung für die deutsche Sprache) や Paul (Prinzipien)の言を全く無視した、W. Porzig (Begriff der inneren Sprachform)の刺戟で始めた拙論「内的言語形式の問題」、(Humboldt より Weisgerber まで) (昭和18年ドイツ文化年報)と、また Marty 独自の見解については、「マルチ言語哲学の根本問題」(昭和19年、ドイツ精神科学研究)(伊藤書店)を参照。なお拙訳のために、いろいろと御高配を頂いた本学会誌編集委員の藤井啓行氏に深謝の意を表するものである。

昭和40年9月 洛北・北白川 訳者

自分はこれまでの思考過程より生じた最後の結論を総括して、言語の科学的研究には、どんな意義があるか、又言語の科学には、人間の精神活動全体と、どんな交渉があるかという問に対して、その回答を試みることにしよう。

この百年間の言語学を仔細に吟味すれば、この科学の意義が殆ど問題にされなかったことに驚かされる。夥しい数の課題、例えば、言語の同族関係、言語の発達、語の再構成、言語地理学等の問題は認められてはいるが、しかし、どうして、これらが一丸となって、まとまりのある一科学となるか、又どこにその中心点があるか、この問題は、依然として、論究されないままになっている。最近に至って、漸くこの問題は、激烈な論争の対象となったが、これは或種の思想的方向が考え尽くされ、多数の課題が、幾十年かの研究によって、既に解決をみて、今や責任上、未来の方向を決定することを迫られていることの証左である。(W. Porzig) 従って、これは言語の本質を意識することであり、これによって、研究を最も必要とするのは、どの点であるか、現在の精神的状態で、言語学が他の近接科学と協力して、最も多く効果を現わすのはどんな場合であるか、また生活上重要な現代の問題に関連して、言語学の意義がどうして実現されるかを認識しようとするのである。自分はこの研究が、これらの問題にも、成果をもたらすものと信じている。

この種の決定に際して、事態が明瞭になる最も簡便な方法は、常に達し

得た結果と全課題とを比較することである。従来、言語研究の方面に於て達し得たものをただ簡単に数え上げるだけでも、余りにも長くなる恐れがあるだろう。それで、少くとも、最も重要な研究の方向を概観することにしよう。

先ず言語の叙述は、世界に於ける益々多数の言語にふれた。事実我々は、今日幾千という言語の大部分を、単に名ばかりではなく、多少共詳細な証述によって知っている。(W. Schmidt, Die Sprachfamilien und Sprachenkreise der Erde の一覽を参照) 重要な国については、方言、特殊語、更に年令別にみた言語さえも研究されている。次に現存する言語の以前の発達段階、死滅した言語が多数我々にも理解されるようになり、言語学の研究が滅亡した文化の言語を解読して、その謎を解き、これによって、文字が、過去に及ぶ限り、太古の石にも、証人として口を開かせたは、その研究の不滅の業績とされている。ここでは、エジプト、バゼロニヤ、アッシリヤ、スメリヤ、ヘッテイテルの記念物の解明が、種々様々の専門科学に対する意義を指示するだけでも十分である。

言語の叙述は、それが一言語構造の實在的特徴を発見するか、或はまた教授の目的を達しようとする限り、文法の形式によって表わされる。今日では、言語を文法的に把握しようとする現在の試みにある機能を評価するには、我々に大抵その標準が欠けている。一外国語について、異常の言語現象を確定すべき問題に直面して、はじめてこの研究に特有の困難性が認められるのである。現代の叙述的文法や規範的文法の完全なことについては、個々の点で、どのように考えられようとも、また因襲的な文法の概念で足りないことがどんなに明白であっても、——この方面に於ける大先輩であるギリシヤ人の精神的能力は、今日では遙かに凌駕されている。——最後に、語彙の蒐集も言語の叙述に属している。時々の単語集より成長して、益々広範囲の、しかも完備した概要に至る徐々の発達を歴史的に追究してはじめて、現代の辞書に収められている研究や成果が正当に評価されるのである。この蒐集に際して、実用的な理由より、一面的に音韻形態を標準として、これによって、最も重要な点の一つに欠陥を生ぜしめたことは、上に述べた通りである。

しかし、大体よりみて、言語の敘述は、前世紀の科学的研究に於て、説明的言語学に一步をゆずらなければならなかつた。言語事實の敘述が紀元前5世紀乃至4世紀にやや確定的な形式をとっているとすれば、説明的言語学は100年余も以前に、言語の同族関係及び言語の發達という事實の決定的な發見によつて、比較的、歴史的言語学が創始されてよりはじめて、科学的な体裁を得たのであつた。事實上、これらの發見によつて、言語と言語現象の混沌たる状態は、一變して秩序ある世界となり、種々雑多の夥しい数の言語より、同系統の言語圏、語族が判然と區別され、中でもインド、ゲルマン語族とその分派、及び全ヨーロッパと近東に及ぶその分布を認識することは、特に重要なことになつた。同様に、文法や辭書の規則的な部分と、不規則的な部分の並立が、解明されて、その結果言語の發達が理解し易くなつた時に、従来は理解できなかつた混乱に突然に意義と形式が生じたのであつた。

自分はこれらの認識の重大な効果を、個々に亘つて指示することを必要としない。比較言語学の偉大な体系が自らを証明するからである。今日我々が種々異つた言語の音韻、形態、語彙、構文上の現象を集めることができ、共有の世襲財と、各時代の新造語を確認し、言語變化の過程と条件を詳細に至るまで知っているものとすれば、これによつて、単に言語上の個々の事實に生命が与えられるのみならず、人類の文化的、精神的發達に作用する種々の力も、我々に明示されるのである。これによつて、これら言語学上の成果を収めた方法が、しばしば他の科学の模範となつたのである。——次に、各言語の構成を歴史的に理解するようになるに従つて、これらの言語自体は、過去の事柄に関して、予期しない指示を与へた。インド、ゲルマン語族という共有の世襲財より、必要な程度に警戒すれば、言語の分裂以前の状态、他の文化との接觸について、有益な推定を下すことができるのである。例えば、あらゆるインド、ゲルマン語にある家畜の名称より、原始的な共有財を認定できることは周知の事實になつてゐる。この場合には、できるだけ用心してかからなければならないのであるが、ドイツ語の *Kuh*、ラテン語の *bōs*、ギリシヤ語の *βοῦς*、古代インド語の *gāus*、或はドイツ語 *Hund*、ラテン語 *canis*、ギリシヤ語 *κύων*、古代

インド語 *śvan* 等のような等式は、これを無条件に証明するものである。なお、既にインド、ゲルマン時代よりのこの言語財を、更にそれ以上に追究することができて、例えば、インド、ゲルマン語に共通の *gūō-* „Rind“ をスメル語 *gu* と関係させ、この比較より、恐らく行われたかも知れない接触の時代とその様式を確定しようとするれば、これは極めて危険な地盤の上の仕事には相違ないが、併し、それでも、太古史の闇に隠れた個々の事実を、確認する殆ど唯一の道である。個々の言語や方言の発達が発達現代に近づくと従って、この意味に於けるその「言語」は、益々明瞭になってくる。我々は転来語の交換によって、それ以外には、伝わっていない民族間の関係の様式と年代をも推定することができる。また音韻及び構文上の現象によって、民族の下層部、それ以外にはみられなかった文化の波を推定することが可能となるのである。特に言語地理学が提示したように、小部分の民族移動、文化の潮流、文化圏は驚くほど忠実に、言語の様相に判然と現われている。従って、必要な程度に警戒すれば、所謂、語義の発達も、この意味で、評価することができるのである。

自分は一々数え上げることを止めて、文字や綴字の発達に関連するすべての附随的な問題をも省くことにする。では、これほど夥しい成果を前にみながら、なぜ言語学の意義を問う必要があるのか？ 非常に多くの古い問題がまだ決定的な解決をみないのに、なぜ新しい課題を探そうとするのか？

これを理解させるためには、先ず言語学の挙げた成果の敘述に、言語学が達成しなかったことに関して、なお二三付言する必要がある。そこで自分には、二つの点の特筆すべき価値あるものと思われる。即ち、(1) 特に現代で、従来よりも一層不満の声を聞く方面は、言語の教育である。勿論、事実として認められている欠陥の責任を言語学に転嫁することはできない。読み書きの習得によって、本来の言語の教育が妨げられ、或は全く形式にのみ重点をおく文法の教授が、往々その形式よりみて、生徒の理解に全然適しなかったばかりではなく、更に自己の領域を越えて、授業に重きをなしたと言っても、言語学にはそれに対してどんな責任があるか。この意味に於て、もし、言語教育の教育上の結果が、往々言語事象一

般の研究に対する深い嫌悪となったにしても、それは明らかに言語学の責任ではない。この場合、責任はむしろ言語教育の側にあつて、この方面では、言語学的な基礎を断念できるものと考えていたことがあり、また現在も考えているからである。——しかも言語教育の核心には、このような歪められた事態に至らしめる一つの欠陥があり、文法的な言語の観察一般の欠陥が、その背後にあるに相違ない。従つて、今日力が及ばないために、学校に於ける言語教育をできる限り、抑制することが弁護されているとすれば、これは言語学にも、重大な問題を課する事実である。

(2) 更に結果の重大なことは、次の事実を考慮して推定しなければならない言語学の欠点である。科学的研究のどんな個処で、言語学と他の科学が交流するか、これを展望すれば、事実、多数の接触点が見出される。即ち、言語学がその対象によって、既に極めて密接な相互関係にある個々の文学へは、強い糸が通じていて、最も広義の歴史とは対象にも、方法的にも、重要な接触が見出される。併し、その他の精神科学との関係は、どうなっているか？ 何よりも先ず、言語学と哲学との関係に、一言触れなければならない。極めて密接な関係より完全に接触を失うに至るまでのあらゆる中間的段階は、史的発達の中に、提示されている。我々に最も近い関係にある現在の状態では、殆どすべての連絡の糸が断ち切られている。哲学の方面では、カシーラー (E. Cassirer) が、漸く五年以前に、哲学のありとあらゆる分派に関する著述は多数にあつても、例えば、言語哲学に関するものはただの一つとしてない事実を確認しなければならなかつた。或は言語学の方面では、例えば、幾十年間基礎的労作と認められた「言語史原理」の著者、パウル (H. Paul) は、言語学と言語史の敘述とは一致するという自説を最後まで主張したもので、最近まで現在の最も優れた一般的入門書 (ギンネケン〔Van Ginneken〕) と推奨されたヴェンドリエスの著書 (J. Vendryes, *Le langage*) も、これと同様の根本的態度より出ている。これは言語学の決定的な二つの瞬間に、言語に対して、何等正当な関係もなかつた哲学的体系に權威を認めた奇妙な宿命より生じた結果である。西洋言語学の起源はプラトーン (Plato) とアリストートルース (Aristoteles) によって、ストア学派の存在にも拘らず、純文法的な経路をとつた

軌道に押し込められた。次に、比較言語学は、ローマン主義哲学の典型的な所産であるが、余りにも早く、実証主義によって、その方向を転じたもので、これと共にカント (Kant) の影響は、決して軽視することはできないのである。カントについては、彼が純粹理性批判の前に、言語の批判を出さなかったのは、彼の最大の欠陥であったという彼を評した有名な言葉がある。批判哲学が殊更その認識手段である言語の批判を断念することのできたのは実に殆ど了解し難い事実である。しかもこの観点はハーマン (Hamann) やヘルダー (Herder) の再批判 (Metakritik der reinen Vernunft 1799) にも明瞭に表われている。

心理学では、殆ど常に言語の問題が起り、殊に児童言語の研究は、極めて有益ではある。併し、特に決定的な点、即ち、思考心理学に限って、ヘーニヒスヴァルト (R. Honigswald, Die Grundlagen der Denkpsychologie) よりは、むしろゼルト (O. Selz, Zur Psychologie des produktiven Denkens und des Irrtums) に個々の傾向が認められるにも拘らず、効果的な協力は認められない。言語学と心理学と病理学との境界領域、従って言語障害の問題は遙かにこれを凌駕している。ヴント (Wundt) の偉大な業績 (Völkerpsychologie 1, Die Sprache) は、その最も有意義な部分で、むしろ社会学の方面に向っているが、この方面との接触では、少くとも、言語学のジュネーヴ及びパリ学派よりは劣っている。更に我々が目を転じて、自然科学、医学、法律学、神学をみれば、個人的な接触は多数にあるが、併し、これまでに指示したもの以上に問題を提出したものは認められない。

自分がこの簡単な概観を与えるのは、この状態にあって、言語学の自律性とそれ自体の価値が単なる接触以上に、精神科学の全範囲に於て、その効力を発揮するのは、どんな場合であるか、という問題をこの概観に結びつけようとするためである。これは文学との関係には殆どあり得ない。でなければ、比較言語学がただ半端な文学の混合物であり、その要素に分解するのが最上であるとみている人々の言は、勿論正当なものとなるからである。或いは自分の考えるところでは、言語学を文体論と解して、本来の言語学を全く理解しないフオスラー (K. Vossler) の説が正しいことにも

なるだろう。また歴史的学科との接触も、相互的援助の範囲内で行われている。これによって、本質的になすべきこととして、言語学に残っているのは、言語叙述の特に実用的な方面と、次に比較的、歴史的文法、語源辞典等の体系となるだろう。これは確かに範囲の広い、内容の豊富な研究領域ではあるが、併し、結局は別々に分れていて、その上に棘のある針金の垣で区切られている。即ち、例に引用される夥しく多数の言語、着手段と研究方法の特異性、これらすべては、多く専門家以外のものに、言語学の様式と研究の結果を洞察する妨げとなり、いろいろな注意と関心をも威嚇して斥けるのである。

これらのすべても、もし言語学の対象である人間の言語が、人間の生活と活動で、同じように隔離され、別々に分れているものとすれば、結局は是認され、堪えられるだろう。併し、我々がこの方面に着目すれば、直ちに言語と、言語を科学的に代表するものとの相互間にみられる釣合のとれない関係を推測するのである。即ち、一方には、常にまたしても人間であることの特徴と言われて、普及の点より言えば、最も一般的で、その作用よりみて、また最も根本的な一文化現象である言語があり、——他方には、最も狭い専門的領域以外には余り知られず、最も好都合な場合でも、その成果の興味ある部分が評価される言語学がある。この不釣合の関係があればこそ、我々は言語学の意義を問い、従来の研究方向以外に、その他の問題を予感するのである。従って、現在の言語学はその対象の最も重要な方面を無視する結果、学界及び一般社会に於ても、人間生活に於ける言語の役割が認められていないと、我々が言うとするれば、我々は言語の本質に関する我々の成果より、必要な補遺をもたらすことができる筈である。

我々は現在の言語学で、徹底的にその威力を発揮している言語観を探求することにしよう。科学的言語考察の現代の形式は、比較的、歴史的なものであって、しかも、この形式は浪漫主義の著しい特色のある成果と目されている。これは正しくもあり、また誤りでもある。正しいというのは、浪漫主義では、一種独特の廻り合わせで、比較的、歴史的言語学の発生する予備条件が与えられていたからである。即ち、言語問題に対する浪漫主義の努力、過去と異国の文化についての研究が、その地盤を作り、これによっ

て、以前はむしろ想像されていた言語の同族関係と言語発達の現象より、一大科学の発達をみることができたのである。誤りというのは、発達を遂げたこの比較的、歴史的文法は、浪漫主義と、既にそれ以前に17世紀及び18世紀が言語の研究に求めたものを実現するに至らなかったからである。この文法は浪漫主義の言語観を実行に移していないのである。比較言語学の任務に関する最も古い、詳細な論述の一つ、即ち、1623年に出たベーコン (Fr. Bacon) の著書「科学の価値と進歩について」(De dignitate et augmentis scientiarum) の第6巻に書かれていることを参照されたい。——「厳密な考慮によって、我々はこの問題の文法を編纂したのであるが、これは語相互の類似性ではなく、語と事柄の類似性、或は意味の問題を綿密に研究するものである。——もし多数の言語、即ち、学術語にも、口語にも、特に精通しているものが、各語の長所と欠点を指摘して、種々の言語の特性を論ずるとすれば、これは結局文法の最上の種類であると考えられる——。又この方法によって、民族や国民の言語より、その精神と風習を洞察することができるのであって、(或いは信じない人があるかも知れないが、)これは決して軽視すべきものではなく、観察に価するものである。」(Cogitatione complexi sumus grammaticam quandam, quae non analogiam verborum ad invicem, sed analogiam inter verba et res, sive rationem, sedulo inquirat — — Illa demum, ut arbitramur, foret nobilissima grammaticae species, si quis in linguis plurimis, tam eruditus quam vulgaribus eximie doctus, de variis linguarum proprietatibus tractaret, in quibus quaeque excellat, in quibus deficiat, ostendens……Atque una etiam hoc pacto capientur signa haud levia sed observatu digna (quod fortasse quispiam non putaret) de ingeniis et moribus populorum et nationum, ex linguis ipsorum) (3, 275頁以下) 従って、これはすべての言語を相互に考察し、各言語の長所と短所を認めて、言語と民族との関係を理解することを目的とする正規の言語比較とも言うべきものである。ベーコンは、ギリシヤ語には、ラテン語の *ineptus* に一致する形のないこと、またギリシヤ語では、多数の複合詞が自由に作り出されるのに対して、ラテン語ではこの点、

極めて厳格であると言うキケロ (Cicero) の言を指摘して、古典語では、格や動詞の形式が多く、近代語では、前置詞的表現や複合時称がそれに代っているが、これは何を意味するか、ということの問題にしている。——次の時代は、これらの思想を敷衍している。自分は1759年に出た思想に対する言語、及び言語に及ぼす思想の相互的影響に関するベルリン学士院の懸賞論文 (Dissertation qui a remporté le prix proposé par l'Académie Royale des sciences et belles lettres de Prusse sur l'influence réciproque du langage sur les opinions et des opinions sur le langage, 1760) ロック (Locke), ライプニッツ (Leibniz), ハーマン (Hamann), ヘルダー (Herder) の見解と最後に1805年のフンボルト (W. von Humboldt) の言葉を述べるに止めたい。フンボルトは言語の研究が「全世界を遍歴する一種の乗物」であると認め、これによって、全世界の最高層と最下層、また種々雑多の様相を眺めるものと信じている。もし、この発達に留意すれば、ポップ (Bopp) がインド・ゲルマン言語学を創造したことは、コロンブスのアメリカ発見にも比すべきであるという言葉も理解される。これによって、言語学の視野に全く新しいものが現れたのであって、我々は19世紀を我々の科学より全く切りはなして考えることはできないのである。併し、又これがために、先ず発達の線が曲げられたことはあくまでも真理である。ここに至って、19世紀の言語学にまとまりのない理由が我々にも理解される。即ち、言語の同族関係と言語の発達の認識より発生した全く新しい状態にあって、極めて多数の新しい問題が生じたので、この科学の発達を規定したものは、資料ではあったが、前途を見通す計画ではなかった。言語の比較と言語史では、同族言語の範囲を限定し、音韻と形式とを比較し、各言語を歴史的に仕上げ直し、発達の法則を発見し、「原語」を推定する等、一つの課題が、次々に他の課題を誘致した。しかも、この発達には必然的に付随して、言語学が種々の言語学に、即ち、インド、ゲルマン言語学、ゲルマン言語学、ローマンス言語学等に分かれたのであった。勿論、ここでは、言語研究の意義を問題にする余地は余りなかったので、我々が研究の進展を制御したようなまとまりのある言語観を求めても、多くは無益である。知らない中に、多く

は諒解の手段としての言語の評価がその根底となっていたらしく、近年の論究で、最も重大な役割を演じたものは、言語は伝達か、表現か、芸術か（8頁参照）という論争であった。この原則的な問題が不確実である証左として、ブルクマン（K. Brugmann）は、文が言葉の単位であるという心理学的主張に迷わされて、彼の偉大な「インド、ゲルマン語比較文法綱要」（Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen）の基底を否定するに至ったのである。即ち、「厳密に科学的な敘述、即ち、対象自体の性質に基づく敘述は語ではなく、文を出発点とすべきである。」（9, II, 1, 3頁参照）「我々の選んだ文法の分類は…言語学の現状とこの著述に課せられた簡潔な敘述では、厳密に合理的な分類より実用的であるから、それによってのみ、正当と認めることができるのである。」10, 624頁参照）

これによって、我々は比較的、歴史的言語研究の最初の世紀が、あらゆる精神科学の根底をも揺がす言語の同族性と言語発達の発見を、純然たる言語学の目的のためと、その条件に従って、利用しているにすぎないという事実を認めるのである。単にその底流として、上に引用したシュタインタール（Steinthal, Einleitung in die Psychologie und Sprachwissenschaft 1871）等の著書と、テグネー（Tegnér, Språkets makt över tanken 1880）をも参照されたい。この状態は必然的であり、幾多の点では、また有益であったかも知れない。併し、シュッハルト（H. Schuchardt）の先例に倣って、度々言われたように、今日の言語学は危機に瀕しているものであり、同時に新しい問題よりはむしろ、言語学の意義を問うものであるとすれば、これは純然たる専門的研究、言語学に於ける分離の時代が既にすぎ去り、言語学が精神科学全体の中に、その位置を求めて、他に与えると共に、また他よりも受けながら、隣接科学与有益な交換をはじめようとする証左である。

併し、どんな方法により、またどんな目的をもって、これを行うべきであるか？もし、今日最も普及している見解を信ずるものとすれば、この意味で言語学は民族の文化を表現するか、或はそれを反映するものとして、言語を研究しなければならないだろう。既にベーコンが指示したこの観察

法は益々多く注視され、多数の成果をもたらしたのであった。自分は例えば、フィンク (F. N. Finck) の講演集「ドイツ人の世界観を表現するドイツ語の構造」(Der deutsche Sprachbau als Ausdruck deutscher Weltanschauung), 盛んな論争の的となったフォッスラー (K. Vossler) の著書「言語の発達に映じたフランスの文化」(Frankreichs Kultur im Spiegel seiner Sprachentwicklung), レルヒ (E. Lerch) のかなり新しい論述「フランス語とフランス人の特質」(Französische Sprache und französische Wesensart) 及びその他の小論文の名を挙げておく。なおこの見解はこれ以外にも見受けられる。例えばシュル (Fr.Schürr) は、最近この問題に関して現われた唯一の明確な論究とも言うべきその論文「言語の本質と言語学の意義」(Das Wesen der Sprache und der Sinn der Sprachwissenschaft) の中で、次のような結論に到達している。即ち、「一時代の文化的現象とその言語的形成との間には、正しい関連を造らなければならないだろう。……この歴史的関連、この歴史的になった連想を発見して、この言語考察はその最も内面的な本質よりみて、歴史的であり結局は最も高い、また最も広い意味の文化史となる。このような関連よりみる場合にのみ、言語史的事実は、それ自体の興味を要求することができる。」(490頁)と彼は言っている。またフライヤー (H. Freyer, Sprache und Kultur) は文化哲学者の見地より、「このような言語そのものとしての言語考察の究極の思想と最高の目標は、言語の形態組織がそれを創造した民族精神の所産である、と解して、一民族の本質が、他の創造物にも明示されているのと同様に、一定の民族性がその言語の語の構成、音調、構文上の結合に、どのように反映するかを理解することになるだろう。」(74頁)と述べている。

我々の得た成果よりみれば、今日行われているこの見解は、あくまでも反駁されなければならない。我々は、言語が一文化を反映するものとみるこのような観察法の価値と現在に於けるその実現性をここで批判する必要もないが、……この見解は当然言語学内に内在する意義を実現するものではない。言語を表現、伝達、諒解の手段、また国民精神のあらゆる衝動が現われている一文化現象とみる見解より出発しているすべての研究は必要で

あり、重要であり、啓発するところも多い。併しながら、これらの研究の基礎となっている観察が言語の本質を正当に評価していないのと同様に、これらの研究も決定的な要素に触れるものではない。我々が得たすべての成果よりみれば、言語学はフンボルト (W. von Humboldt, *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts* 1830—35) の名言より出発する時にのみ、その意義を実現することができるのである。即ち、フンボルトは、「言語は相互的理解の一交換手段に止らず、精神がその力の内的活動によって、自己と対象との間におかなければならない真の世界であるという感情が、実際に心の中に起る時、言語学は益々多くを言語の世界に見出し、その中に入れる正しい道歩んでいる。」(176頁)と言っている。これによれば、人間生活に於ける言語の意義を正しく評価する言語学の研究は、この「中間的世界」とそれを形成するいろいろな力を探究することである。

ここに於て、比較言語学には、全く特殊な課題が与えられる。我々もまたように、我々はすべて幼少の頃より、国語の世界に入って、成長したのであり、また現存する言語の圧力によって、我々の経験を全く一定の方向に消化し、遂にこれによって、一つの世界像、即ち、我々の国語の世界像を得たのである。我々はこの世界観の形式で、生活しなかった時代をもはや想起しないので、この世界像は、我々にとって、自然より与えられた、正しいものと思われるのである。従って、国語と共に獲得したこの言語財は我々のあらゆる知的活動に際して、建設の基礎となるもので、我々の行動の結果にも、当然このスタンプが押されるのである。個々の人間は、たとえ僅かな部分でも、この引きついだ世界像を再吟味しようとすることは全くできない。さてここで、比較言語学の研究がはじまる。比較言語学にしても、直接の方法で、このような言語世界の構成を解明するわけには行かない。誰しも自分の顔を自分でみることができないものではなく、それには鏡を必要とするからである。そこで比較言語学は言語の相違と言語の同族性及び言語の発達を参考にしなければならない。従って、言語の比較研究は種々異った言語の世界像の構成と特質とを研究する手段である。これら

言語は、どれもが、普遍妥当性を要求することはできず、またありのままの現実を反映するものもない。併し、この比較によってこそ、完成の可能性が認められ、種々の言語の成果が相互に考慮されて、それを基礎とした業績の生産能力が測定されるのである。従って、自分はこの意味に於て、言語学は内的言語形式の研究によって、或る言語で考えられ、語られる一切と、知的活動を基礎として、言語を所有するものの行う一切を評価する鍵を我々に与える、とすることができると信じたのである。(Weisgerber. Das Problem der inneren Sprachform und seine Bedeutung für die deutsche Sprache 251頁)

さてこの原則的な態度より、個々の問題と多数の課題が生じてくるが、もし我々のよく知っているような言語学の成果が、事実、言語のあらゆる方面を正しく評価するものであれば、それはこれら多くの問題や課題の中で利用され、補遺されなければならない。また、これによって、言語学が100年間の極めて熱心な専門的研究で、言語の同族性と言語の発達という革命的な認識より得た一切も、全精神科学に利用されるのである。同時にこれらの研究によって、上述のような言語と思考の関係、国語を有するものの思考と行動に対する国語の影響に関する見解が確認され、これによって、それを完全に確信する力を得るに相違ないのである。

更に、これらの研究は、二つの主要部門、即ち、語彙と構文形式の方面で行われなければならない。

これまでに見たように、一国民の語彙がその経験を概念的に消化したものの総計であり、結果であるとすれば、一言語の語彙の研究は、先ず第一に、この国民の概念世界の認識に役立つものである。これは先ず言語の比較研究の仕事である。この第一の課題は、語彙のあらゆる部分を包括している。即ち、個々の一致と差異にはじまり、種々の生活領域の言語的形成の比較を経て、各言語の語彙の特質を示す著しい傾向を確認するに至るのである。自分は簡単な例によって、この種の研究を暗示するだけに止めなければならない。外国語に翻訳するものは、異った言語の語が、概念的に一致しないために、それより生じてくる困難に絶えず遭遇している。フランス語の fleur は、ドイツ語で Blume と Blüte という二つの概念によ

って示されているものを総括し、またフランス語の *cheveu* と *poil* という二つの語に当るものは、ドイツ語の総括的な *Haar* である。多くの言語では、*Mensch* と *Mann* が区別されているが、他の多くのものは（例えば、フランス語の *homme* 参照）、この差異を認めないようで、この種の実事是一種独特の問題を提出している。或はフランス語の *sentir* は、三つの感覚範囲を十分に表わすことになっている。次に「訳し難い」語、例えば、ドイツ語の *Heimat, Gemüt*, フランス語の *élan, esprit* 等がある。

我々が種々異った言語の概念集団を総合的に比較すると、このような差異は、特に我々の目につくものである。ここで生じてくる個々の課題の実例は、自分が以前に示したように、次の通りである。

(1) 我々は、一定の生活領域を表わす語彙の構成を探究しようとするのである。馬、色彩、親族語の例を参照されたい。

(2) 他の言語と比較して、この概念的消化の特質を確認することができる。更に色彩、親族語、数詞の例と、ドイツ語の著しい段階に対して、フランス語では、好んで一般的概念が用いられることを参照されたい。

(3) この特質を、その歴史的発達より追究して、理解する必要がある。親族語、色彩と光彩現象の例を参照。何よりもまず、このような発達を規定する力も研究されなければならない。

(4) これまで、我々の活動は、言語学の専門研究の範囲で行われている。併し、これで問題は片づいたのではなく、これらの成果を一般社会に活用することが、最も重要な問題として残されている。しかも、言語的事実が話す人と言語団体の生活、思惟、行動に、その効果を現わしていることを我々が研究する時、他の科学と実生活に至るこの道が見出されるのである。言うまでもなく、我々はここで、依然として方法上の大困難に直面している。言語の事実が一国民の物心両方面の生活に影響を及ぼしたことは、確かに個々の場合に於て予感することができる。自分は哲学の概念構成に及ぼしたギリシヤ語の影響に関するシュテンツェル (J. Stenzel) の論文を指示しておきたい。併しこれは実際に把握できるものに達するのは、どれほど困難であるかを正に我々に示している。またランツベルガー (Br. Landsberger) も、バビロンの世界自体の概念性 (Die Eigenbegriff-

lichkeit der babylonischen Welt) に関する論文で、この種の卓越した幾多の観察を示している。併し、このような概観を得る前に、多くの極めて詳細な予備的研究が行われるべきであって、従って、確実な方法が発見されるまでは、このような問題は特に慎重に取扱われる必要がある。次の一例によって、或はこのような研究の方法を推知することができるかも知れない。即ち、既に述べたように、ドイツ語には（近親の言語もこれと同様に）嗅覚を標示するのに用いられる形容詞で、他の感覚領域の語、例えば、「赤い」(rot), 「暖い」(warm), 「甘い」(süß) に該当するような特殊な形容詞が非常に少いのである。その一つの効果を確認することは容易であった。即ち、嗅覚が我々の生活に於て実際に演じている役割とは全く反対に、我々はこれについて殆ど説明することができないのである。これと同様に、例えば、文学に於ても、この感覚領域の敘述を利用することは非常に少なくなっている。併し、これらの成果は、更に遠くに及んでいる。化学、生理学、心理学では、嗅覚が幾種類にも分けられるかという問題、換言すれば、少数の基本的な質に還元できるかどうかという問題について、盛んに論議されている。永い間、相次いで実験が行われたが、その結果は、全く相反するものであった。即ち、ヘンニング (H. Henning, Der Geruch) は嗅覚に関する著述で、六つの基本的な質を発見し、シュトラムリク (E. von Stramlik) は最近の研究 (Handbuch der Physiologie der niederen Sinne) で、純粹の香料と同数の嗅覚の質があることを確認している。さて自分はこれらの結果が相違するのは、言語の事実に対すこれら著者の異った態度によることを実証したつもりである。詳細については、自分の論文 (Weisgerber, Der Geruchssinn in unseren Sprachen, If. 46.) を指示しなければならない。

併しながら、少し考えてみても、この種の問題では、先ず言語の状態を顧慮すべきことが分る。科学が上述の問題を解決するために、自己観察、或は実験にかかるものとすれば、科学のみるものは勿論、人間「それ自体」ではなく国語によって習得した形式で、体験し、思考する個々の人間を言うのである。ところが我々の諸言語には、嗅覚の質を表わす総括的な概念がない。従って、もし科学が、その実験の結果として、嗅覚は余りにも、多

種多様で、少数の基本的な質に還元されないことを確認するとすれば、この結果は、先ず被験者が個々の嗅覚を分類させる概念をその国語に見出さないという事実を確認することに外ならないのである。ここで科学と言語が、極めて密接に関連していることは、多数の事実によって確証される。自分は更に一つのことだけを挙げておきたい。即ち、隣接した味覚の領域では、この分類が極めて容易に行われている。これは言うまでもなく、言語がその予備工作をやったのであるから、なんら不思議でもない。この領域に於ける生理学的研究の結果で、ただ注目すべき点は、四つある味覚の質の中で、三つ、即ち、「酸い」(sauer), 「辛い」(bitter), 「甘い」(süss)は往々純然たる形の全く異った刺戟物によって喚び起すことができるのであるが、第四の質、「塩辛い」(salzig)は一つの刺戟物、即ち、食塩によらなければ完全に喚起されないことである。(上述の拙論 137 頁参照)。この確定的な事実も、単に使用される言語手段の構成を反映することがあり、また反映しているのだらう。即ち、「辛い」(bitter), 「酸い」(sauer), 「甘い」(süss)は抽象的な形容詞で、言語では、一定の物質に結びついてはいない。従って、この感覚の質は、もしその作用が類似しているとすれば、全く異種の刺戟物にも認定されるのである。これは人間が幼少の頃より、言語の習得と同時にしていることである。これに対して、「塩辛い」(salzig)は対象よりきた名称であって、この概念は若い時より、最上級の塩、食塩によって喚起された体験に固着しているものであるから、「塩辛い」(salzig)と言う質は当然食塩に制限されている。

従って、これらの観察が目差すところは、この点であって、我々が人間を対象とする場合に、我々のみる人間は、「自然の」状態にあるのではなく、その言語知識の影響を受けているのである。これが人間の知的行為の総体ではあるが、この種の問題は、言語の及ぶ限り起っている。これらの事象を批判しようとするれば、言語による前提を知り、その作用に留意することが必要であって、言語学はそれがために、その予備工作をしなければならない。語は *φύσει* であるか、又は *θεσει* であるかというあの古い問題を、言語学が新しい意味でとり上げるべきだとでも言いたいのである。ここで問題は、語の音が名づけられた対象の本質と多少の関係があるかど

うかを、古人と共に探究するのではなく、どの程度まで語の概念が *φύσει* であるか、*θεσει* であるか、換言すれば、人間が達することのできる真実に、多少とも接近を示すかどうかである。

従って、言語認識のこの研究によって、言語学は各科学の全組織と交渉をもつことになる。ここであらゆる誤解をさけるために、明言しておくが、言語がはじめて思考を可能にするものであり、事物は言語によって考えられる範囲に於てのみ存在するとも主張するのではなく、また「真なるもの」を認識する可能性について判断を下そうとするのでもないのである。ここでは、これらすべてを討究するのではない。先ず問題は、言語層の影響を提示することであって、勿論、これに関しては、言語層が何よりも我々の思考と活動に関与していて、我々は多くそれ以上に出ないことを主張するのである。従って、原則的な点を強調するために、今一度嗅覚と味覚の例をとるとすれば、味覚には四つの基本的な質があり、その中で三つは、全く種類の異った物質によって喚起されるが、第四の質は単に一定の物質によってのみ完全に喚起されるという確定的な事実、又は純粹の香料と同数に、嗅覚の質があるという確認された事実は、四様に理解することができる。即ち、それをこの領域に対する人間の自然な心理的態度と認めるか、或はこの事実を我々の感官の生理的構造より解し、それによって、味覚には四つの異った種類の刺戟（しかも、この四つのも ののみ）に対する感受器官があるが、これに反して、嗅覚には更にそれ以上のものに対する器官があることになり、我々はこれに応じて、これらの感覚を判断するものと仮定しなければならないだろう。又はその場合に、物体の性質、従って、外界の状況に立ち帰る。即ち、物体は上述の分類で、四つの味覚を刺戟する動因を与えるようにできていることになる。若しくは、この全体に、国語の概念によって生じた解釈のみが認められるのである。これら四つの層の中（…即ち、外界、生理的現象、自然の心理的態度、言語による解釈……）、上に挙げたような確定的事実は、そのどれに該当するものであるか？ 我々が普通に解釈する場合に、（……科学的実験も、勿論、被験者の正常の解釈法によるのであるが……）最上の、即ち、言語層の中にも、活動することは、疑う余地のないものと思われる。それは我

々の解釈が言語的、概念的知識を基礎とするからであって、我々がそれを言明する時は、言うまでもなく、言語的方法にのみよるものである。この言語による解釈を、我々は国語の修得によって、獲得するのであるが、この国語は言うまでもなく、我々に名称ばかりではなく、名称のある概念をも媒介するのである。これによって我々はあらゆる現象に対して、一定の見地を受けついたのである。これを出発点とすれば、何れにしても、提出されるべき（……併し、通常は看過されている……）問題として、次の疑問が生じてくる。即ち、第一に、国語より得たこの解釈法は自然の心理的態度に一致しているか？ これは直ちに前提するわけには行かない。国語によって、我々の解釈が変化する確実な例より（色彩を参照）、我々は必然的に他の領域に於ても、同様の条件を推定しなければならない。従って、言語の状態より容易に察知することのできる上述の味覚及び嗅覚の解釈法も、もし形容詞「辛い」(bitter), 「酸い」(sauer), 「甘い」(süss)のような言語手段がないものと考えれば、やはりこのままになっているか、どうかは、少くとも問題にすべきである。——更に、これに次いで、我々の言語的、或は自然の心理的解釈法が、生理的基礎とどんな関係にあるか、と言う問題が起るだろう。我々は上述の状態より、例えば、味覚器官には四種の異った刺激に対し、嗅覚器官には遙かに多数の刺激に対して、感受性があると断定しなければならないのか、或は国語による解釈法の実事のみを生理的な状態に入れて考えているのであるか？ 国語の概念より来る態度、または自然の心理的態度が生理的現象に基づいていることは確実であるが、これらが一致することはあり得ないことである。このことは、他ならぬ言語比較の観察によって否定されている。——殊に我々が感覚と外界との関係の問題全体について、現在よりも明瞭にみていない限り、外界の事実に接近することは尚一層困難である。客観的な事実が、どの程度まで、そのまま変えられることなく、種々の層を経て、言語に表示されるようになるか、これは全く予知することができないのである。——このような関連を一度認識した時には、これら種々の問題に、回答を与えるために、恐らく協力の方法を見出すことと思われる。併し、我々は言語層を最上位の層とみて、これよりはじめるべきであり、又この層に限って、多く看過

されていればこそ、言語学は特に言語層の状態を指示しなければならないのである。

この種の問題は言語学によって発見され、討究されるべきであって、もし言語学が言語の生活及び科学との交渉を強調するものとすれば、幾十年の間、一面的に音韻上の問題が重要視されたために、この観察法が殆ど全く妨げられていたのであるから、言語学はそれだけ益々切迫した義務を果すことになるのである。何人も言語を無視して、思考、現実、論理的な問題等について研究するようなことが、いつまでもあり得ることではなく、又あってはならないのである。言語学がはなればなれの個所で、正当な成果を収めずに取扱われていた事柄に、その自然的な関連を再び与えると共に、自分が述べたように、宿命的にあらゆる精神科学の努力に著しく認められる欠陥を補うのである。

構文形式の学説もこれと全く同一の方法によって完成すべきである。この場合にも、一言語の構文上の形式、全関係組織をその構成より認識し、他の言語と比較して、その特質を確認し、歴史的研究によって、その発達過程を理解することが必要である。これらの問題はポルツイヒ (W. Porzig) がその論文「インド、ゲルマン語構文論の諸問題」(Aufgaben der indogermanischen Syntax) で、個々に亘って詳述したので、自分はこの研究が特に思考に対する構文上の現象の機能を提示すべきことを強調さえすればよい。これらの問題の圏内に入るものは、例えば、「我々の世界像の基本的形式(性質、時間、抽象)が構文論によって、その発生より観察できること」(139頁)、或は新しい範疇の発生(例えば、話法及び体(アスペクト)の範疇より発生する時間的段階の範疇)を精確に追究すること、全言語の関係組織を相互に比較することである。従って、これらの問題は、以前に品詞論で指示したものと、全く一致するのであって、ポルツイヒも強調しているように、これによって、その最も重要な成果を、単に言語学のみならず、精神史一般にとって期待するのは当然のことと思われる。併し、構文論の意義はこれでも言いつくされたのではない。我々は更にそれ以上を望まなければならないが、これは今なお夥しく存在している研究に、その他のものを追加するためではなく、それらの研究に、規準と

中心点を与えるためである。構文上の事実は、その成果よりみて、はじめて一般社会にとって重要となり、言語学は、これらの成果を追究しなければならない。ここで状態は恐らく語彙の場合よりも、更に困難であるが、フィンク（Finck）の行ったような観察には、あくまでも正当な点がある。即ち、「挿入文を造る、あの純ドイツ的な傾向は……完成された思想的活動を証明するのみならず、殆どこれ以上には、よく考えられないような思想的活動へと導くものである。この種の結合文が話すものと聞くものに、どれほど過大の要求をするものであるか、これは我々が外国人にこういうものを模倣し、理解せよと頼む時に、これらの人々より教えられるのである。」(上掲書 102 頁) とフィンクは述べている。

この研究が単に言語研究の専門的目的に用いられるのみならず、人間生活のあらゆる方面、即ち、科学にも、日常の生活にも、役立つことを明確に強調することは、恐らく必要でないかも知れない。自分が少くともここで述べておきたいのは、まだあらゆる点では確定した基礎はないが、全く正確なメッシング (E.E.J. Messing, Methoden und Ergebnisse der wirtschaftssprachlichen Forschung.) の経済言語研究の計画の根底となっている思想である。……即ち、「経済界の解明に協力する新しい研究が言語学に切望されている。経済界にも、言語はその生活と行動、思考と錯誤に形式を示し、従って、我々にその解決の鍵を提示している。この鍵によって、言語学は考える経済人に、絶えず言語を造り出す彼の精神の作業場内に入る門を開き、彼が経済的な目的を追究するために用いる不思議な言語の力の種類と本質を深く洞察させるのである。」(3 頁)

これによって、言語学の核心は、言語の認識とその成果の研究、要するに内的言語形式の問題に求めるべきである。我々が言語学の研究で知っている一切は、この目的に重要である。即ち、多くの個々の研究、語源、意味論、構文論、文体論、言語叙述、比較、語史よりこの体系ができてくるのである。併し、それのみで実際に有益なものが生じ得る、これらすべての個々の研究も、言語内容を考慮に入れてはじめて、一般社会のために、統合され、評価されて、これによって、純専門的の価値を越えてゆくのである。

従って、自分にとっては、このことが決定的な点と思われる。即ち、言語に入って生長する人間は、その一生涯を通じて、国語の制御を受けるも

のであり、国語は事実、人間に代って考える言語である。一国民がその言語を形成するように、また逆に言語は団体と後世にその影響を及ぼすものである。この意味で、国語は個人に対する宿命であり、民族の言語は団体に対する宿命の力である。これは決して盲目的な運命の力ではない。即ち、人間が言語の中で支配する種々の力と、言語の作用する法則を知っていれば、人間は更につづいて言語を育て、言語に自らの意志を押しつけることもできるのである。このような観点の下に、言語学はその研究に着手すべきであると思われる。これによって、言語学は、人間の精神活動と協力して、その意義を実現し、その対象である言語の効力範囲によって、自らに与えられている影響を及ぼすような見地を得るのである。